



さる

ま

げ

ん

き

王

国

保健福祉課保健推進係

Tel 2・1212



がんと向き合う ～乳がん～

歌舞伎俳優の海老蔵さんの妻で、元ニュースキャスター小林麻央さんが乳がんの治療をしていることが報道され、まだ若く幼い子どもがいる麻央さんの乳がんの告白に大きな衝撃をうけました。

以前、日本人女性が乳がんになる確率は、20人に1人といわれていましたが、今では12人に1人と増え、女性がかかるがんでもっとも患者数の多いがんです。今回は、がんと向き合い、治療や家族のこと、日々の出来事などを綴った麻央さんのブログの言葉を借りながら、乳がんの早期発見の大切さについてお伝えします。

※囲みの文書は、小林麻央さんのブログ『KOKORO』より抜粋しています。

小林麻央さんの「メッセージ」が皆さんに届き、乳がんの早期発見の大切さが広く伝わってくれることを願います…。

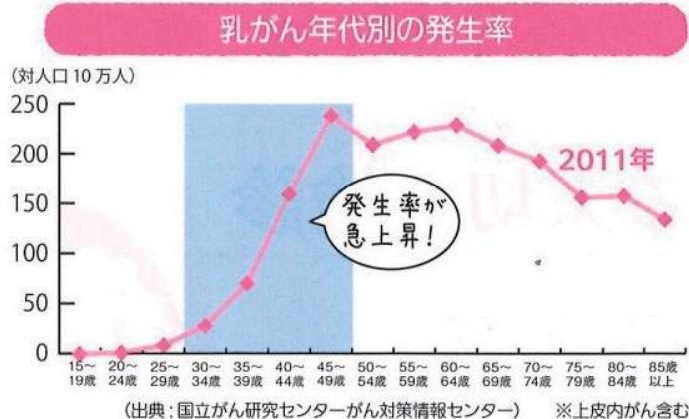
もしかしたら、今後、私のブログを読んで、悲しく感じたり、知ってしまつことで不安になってしまったり、何かを思い出して怒りを感じてしまつ方もいるかもしれません。でも、私の体験をどんな形でも、活用してくれる方がいたらお願い、書きたいと思います。

乳がん発症年齢

2014年2月、主人と人間ドックを受けました。一番の目的は、身体を酷使することも多い「主人の身体検査」であり、私はまだ31歳ですし、「付き添い」で受けるくらいの気持ちでした。

乳がんは30歳あたりから増えはじめ、40代後半から50代前半に最も多くみられます。【図1】若い世代がかかりやすいがんというイメージがあるかもしれませんが、今は閉経後

【図1】



の患者さんが増えていて、閉経前と閉経後はほぼ半々くらいになっています。

乳がんの発症には「エストロゲン」という女性ホルモンが関係しています。閉経後では主に脂肪組織でこのホルモンが作られるようになるため、閉経後の肥満の女性は乳がんのリスクが高くなるといわれています。

乳がんの検査

人間ドックでは超音波の検査で、腫瘍が見つかりました。

再検査の日。

まずは触診。先生に「このしこりですね」と言われましたが、同じように触ってみても、自分ではさっぱり分かりません。もう一度超音波とさらに、マンモグラフィーでも検査を受けました。

町の乳がん検診では、マンモグラフィー検査をしています。乳がんはごく初期のうちから、壊死型石灰化という、カルシウムが沈着した痕がみられるタイプがあります。マンモグラフィーはこの「石灰化」をみつけることが得意な検査です。

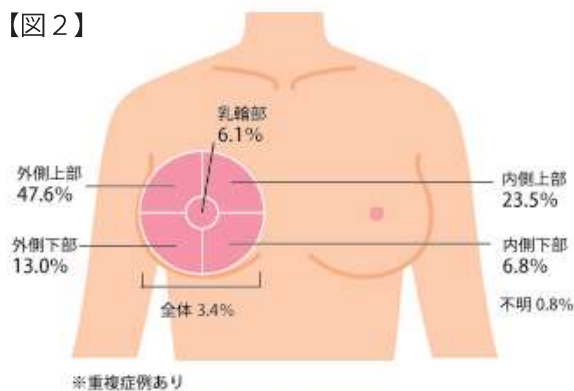
50歳以降になると、乳腺が脂肪に置き換わりレントゲンでは脂肪組織は黒く映るため、しこりとの差がはっきりして石灰化が発見しやすくなります。しかし、乳腺がしっかりしている若い方では、乳腺も白く

乳がんの好発部位

映ってしまったため乳房全体が白く映り、そのなかにしこりも隠れてしまいがちです。そのため、若い年代では超音波検査がよく行われます。超音波の検査では乳腺は白く映りますが、しこりは黒く映るため、若い世代の方でもしこりを映しだすことができます。超音波検査はしこりをみつけることが得意ですが、小さな石灰化をみつけるのは苦手です。また、しこりの特定はできないためがんだけでなく異常と判定する数が多くなるという欠点もあります。

そのため、精密検査の際には詳細な視触診、超音波検査、マンモグラフィー検査などを行い、必要に応じて細胞や組織をとって顕微鏡で調べる検査をします。

【図2】



再検査では「心配ない」との結果で、安心し、癌への不安が残ることもありませんでした。けれど、何気ない時に、左の乳房を触ってみるのが癖になっていました。不安はないとは言っても、どこか潜在的にはあったのかもしれない。

息子と遊んでいたときのこと、何気なく、胸元から手を入れて、左の乳房を触りました。

どきっ。

いきなり本当にパチンコ玉のようなしこりに触れたのです。なんだこれ。心臓が音をたてました。

乳がんは乳房のどの部分にもできますが、いちばんできやすいのは、外側上方にあたるところで、半数がここにあります【図2】。

なぜ外側上方がもっとも多いかといいますが、「乳腺」がいちばん集まっているからです。乳腺は母乳をつくる「小葉」と母乳を乳首まで運ぶ「乳管」で構成されていて、乳がんの9割は乳管の細胞ががん化したもので、残りの1割は小葉から発生しています。

しこりは再検査の時には麻央さん自

身はわからない位の大きさでしたが、8か月経過後すると自身でもわかる大きさになっています。自身で気づくしこりの大きさは1cmくらいから、医師の触診では1cm以下、0.5cm程度から見つけることができると言われています。1cmのしこりは1年で倍の大きさになると言われています。そのため、検診と併せて定期的に自己触診をすることも大切です。

乳がんの治療

がんがまだ乳管内にとどまっているのを「非浸潤性乳管がん」といい、その後、がん細胞が乳管を破つてまわりの組織に広がってしこりをつくるようになったものを「浸潤性乳管がん」といいます。乳房の近くにはリンパ節があり、浸潤性の乳がんの場合はリンパ液や血液にのって転移しやすいと考えられ、放射線療法や抗癌剤治療など、様々な治療法を組み合わせて治療をすすめていきます。しこりのない非浸潤性乳管がんは、手術でしっかり取り除くことで10年生存率は95%を超えます。また、乳房温存手術も選択できるなど治療法も広がります。そのため、できるだけ早期に発見することが大切です。

▼乳がんで妻をなくした高本医師は雑誌の取材に次のように答えています。

『何年も検診を受けていないという女性がことのほか多いのです。家事や育児で忙しいこともあり、自分のことはつい後回しにしてしまふ。まずはぜひご主人が「検診を受けなさい」と言ってあげる。言うだけでなく、休みをとるなどして「今日は自分が家のことをするから、行っておいで」と送り出すくらいのことをしてあげてほしい。一緒に人間ドックをうけようと言ってあげるのもいいと思います。』

麻央さんも海老蔵さんの体を心配して、一緒に人間ドックをうけたことがきっかけでした。麻央さんのブログでは、がんと向き合いながら、妻として、母として家族のことを大切に思っていることが伝わってきます。自分自身や周りの大切な人のことを思い、元気でいるためにも、ぜひ元気な時からがんと向き合い検診をうけていただきたいと思います。

今年度の検診の日程は、健康カレンダー（5月）に掲載しています。申し込みは随時、お電話等で受付けていますので、ぜひお申込みください。